はじめに
Ⅰ 緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ 資料編

はじめに

はじめに
Ⅰ緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ資料編

Fig.0-2.1F エントランス

Fig.0-3. ピロティー下のエントランス前

はじめに
Ⅰ 緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ 資料編

Fig.0-4.2019 年解体前の旧都城市民会館の様子　北側からの風景

はじめに
Ⅰ緒言
Ⅱ調査概要
Ⅲ調査結果
Ⅳ市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ資料編

Fig.0-5. 木製サッシ

Fig.0-6. 木製サッシ扉

はじめに
Ⅰ 緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ 資料編

Fig.0-7. 車寄せ横階段

Fig.0-8. 東側架構集中部

はじめに
I 緒言
II 調査概要
III 調査結果
IV 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
V 資料編

Fig.0-9. 西側外観

Fig.0-10. ホール客席中段

はじめに
Ⅰ 緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ 資料編

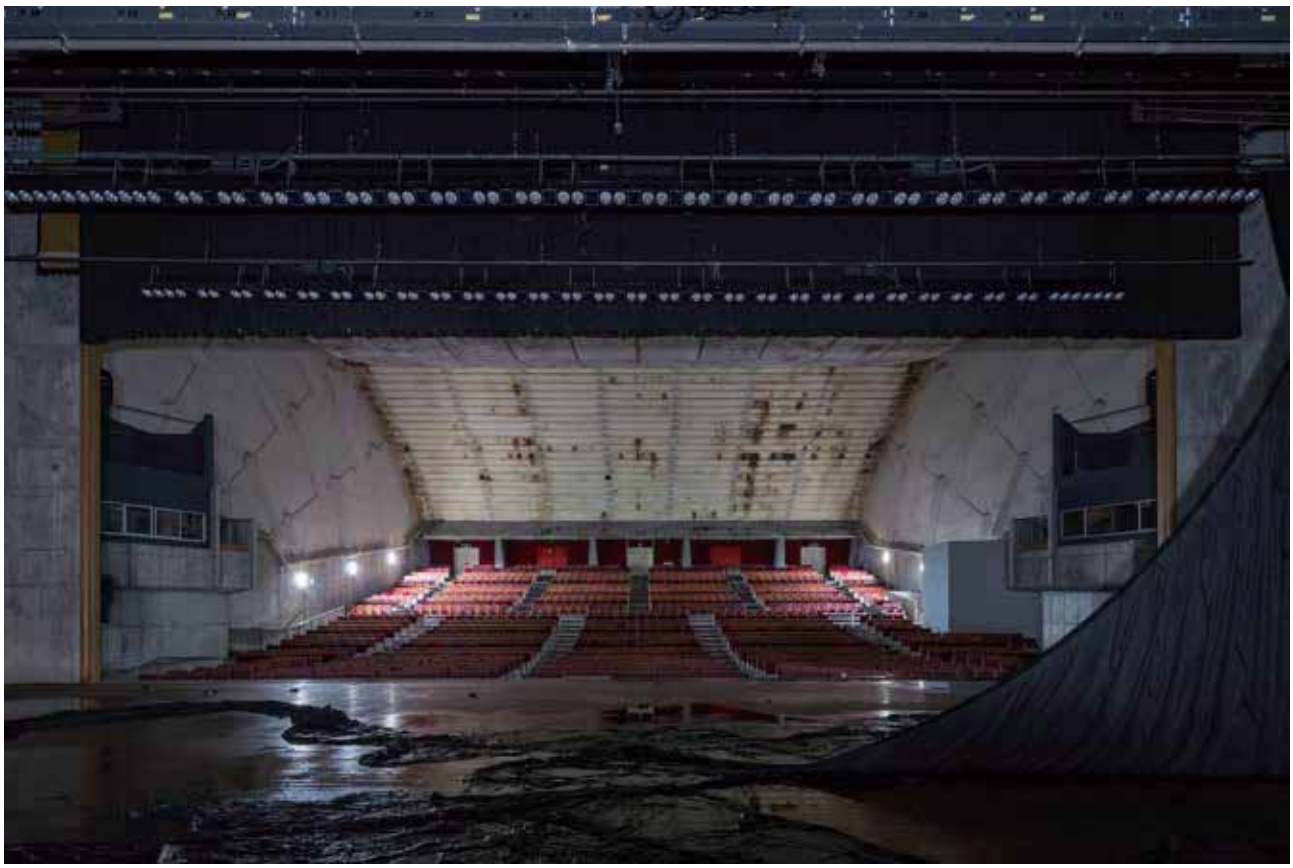

Fig.0-11. 舞台から客席

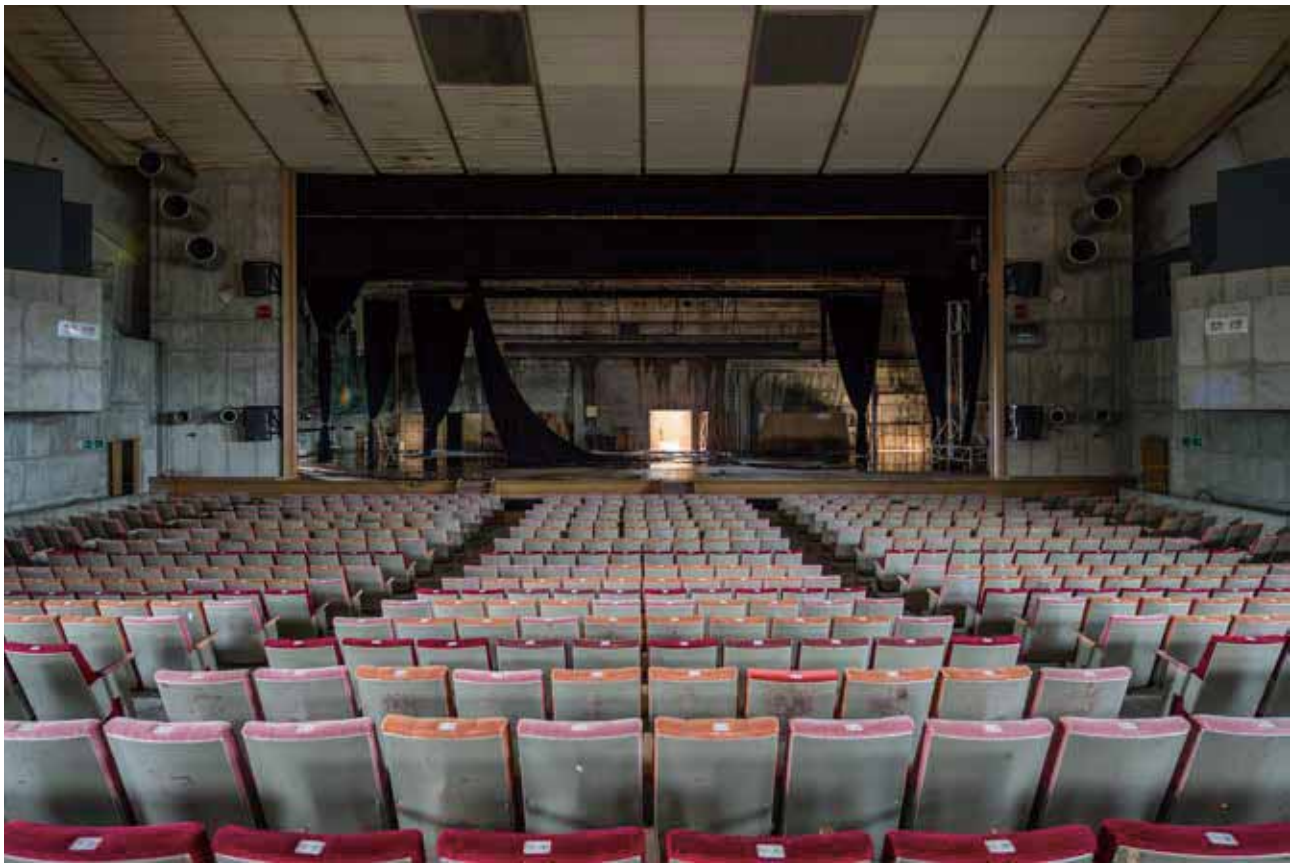

Fig.0-12. 客席から舞台

はじめに
I 緒言
II 調査概要
III 調査結果
IV 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
V 資料編

Fig.0-13. 架構一部外観

Fig.0-14. ガーゴイル

はじめに
Ⅰ 緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ 資料編

Fig.0-15. 北側外観

Fig.0-16. 東側屋外階段

目次

はじめに 3

目次 12

例言 14

Ⅰ　緒言 17

古谷誠章（一般社団法人 日本建築学会 第 55 代会長） 18

苅谷勇雅（日本イコモス国内委員会（ICOMOS Japan）副委員長） 20

村松伸（「都城市民会館 1000 の記憶プロジェクト」発起人） 22

Ⅱ　調査概要 25

2-1.　調査の目的と方法 26

2-2.　建物の概要 26

2-3.　設計者の概要 28

2-4.　都城市民会館の歴史 31

2-5.　参考資料 36

Ⅲ　調査結果 39

3-1.　スケルトンの設計方法と解体調査による検証 40

3-2.　都城市民会館の設備計画 78

3-3.　インフィル（非構造部材）のデザイン 82

3-4.　外構デザイン 85

3-5.　設計者としての菊竹清訓［解題／遠藤勝勧＋斎藤信吾］ 87

Ⅳ　市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯　101

4-1.　市民会館の活用実績　102

4-2.　閉館後の保存活用の検討経緯　103

Ⅴ　資料編　113

5-1. 創建時図面・改築時図面　114

5-2. 実測図　130

5-3. 工事監理資料　165

5-4. 工事写真資料　194

5-5. 都城市民会館再生活用計画　220

5-6 . 都城市民会館展概要　244

5-7 . 新聞記事の調査記録　251

5-8 . 都城市議会での審議経緯　368

5-9 . 簡易３D 制作による調査記録　428

5-10 .VR デジタル・アーカイブ　436

5-11 . 模型製作の監修　446

5-12 . 映像資料の制作　452

5-13 . 日本イコモス国内委員会資料　454

5-14 . 近現代建築の評価基準の検討・提案　456

はじめに
例言
Ⅰ緒言
Ⅱ調査概要
Ⅲ調査結果
Ⅳ市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ資料編

はじめに

本報告書は、2019（令和元）年に解体された都城市民会館についての調査報告書である。

建築家・菊竹清訓（1928-2011）の設計により 1966（昭和 41）年に竣工した都城市民会館は、メタボリズム建築の傑作として世界的に著名な建築作品であり、また都城市の地域文化施設として都城市民に長く愛されてきた建物であったが、新施設の建設に伴い 2007 年３月に惜しまれながら閉館した。その後、南九州大学に無償貸与されて活用が期待されたが諸般の事情から実用に至らず、2018 年には都城市へ返還が申し入れられた。日本建築学会は事態の緊急性を考慮し、当時の会長のもとに特別委員会を立ち上げ、都城市にこの建物の保存再生に向けた提案と助言を行ったが、期限内に再生を引き受ける事業者を見付けることができず、2019 年には解体が決定した。そして解体に先立ち、都城市は建物の貴重な歴史的価値を広く後世に伝えることを目的に、日本建築学会にその調査と報告書の作成を委託し、建築学会はこれを受けて建築歴史・意匠委員会に「都城市民会館調査記録 WG」を設置し、調査を開始した。

歴史的な建造物の記録保存では、建物の歴史的価値を見定め、その価値を伝えるために必要な調査を行い、報告書に纏めることが求められる。具体的には、資料調査を行ってその建設経緯や竣工時の建物の特徴を把握するとともに、現状調査を行って現在に至るまでにどこがどのように変化し、また当初の状態がどの程度保存・継承されてきたかを記録することで、後世にその失われた建物の歴史的価値を伝えてゆく。近年では、『日本近代建築総覧』（以下、『総覧』と略す）に掲載されるような昭和戦前までの歴史的建造物では、こうした作法がようやく一般化してきたと思われる。しかし、都城市民会館のような戦後の近現代建築については、『総覧』に代わる歴史的建造物の基礎台帳がまだなく、建築史の研究対象としても日が浅いことから、歴史的価値をどこに見るかの評価軸が定まっていない。そこで、今回の記録保存にあたっては、文化庁が 2015 年にスタートした 1945 年以降に竣工した日本の近現代建築を対象とする全国調査「近現代建造物緊急重点調査」で示された「7 つの評価基準」（資料編に関連論文を収録）を参照し、特にその中の「革新性」、「作家性」、「地域性」という３つの観点を重視して調査を行った。

都城市民会館は、近現代建築としての歴史的価値が十分に議論される前に取り壊されてしまったが、今回の調査を通じて蒐集された多くの情報を報告書にまとめ、後世に伝えることで、日本の近現代建築の歴史的価値に対する評価軸の一日も早い確立と、それを活かしたよりよい保存活用事例が出現することを期待している。

日本建築学会　建築歴史・意匠委員会
都城市民会館調査記録 WG
山﨑鯛介

はじめに
Ⅰ 緒言
Ⅱ 調査概要
Ⅲ 調査結果
Ⅳ 市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ 資料編

Fig.0-17.2019 年解体前の旧都城市民会館の様子

はじめに
Ⅰ緒言
Ⅱ調査概要
Ⅲ調査結果
Ⅳ市民会館の活用実績と閉館後の保存活用の検討経緯
Ⅴ資料編

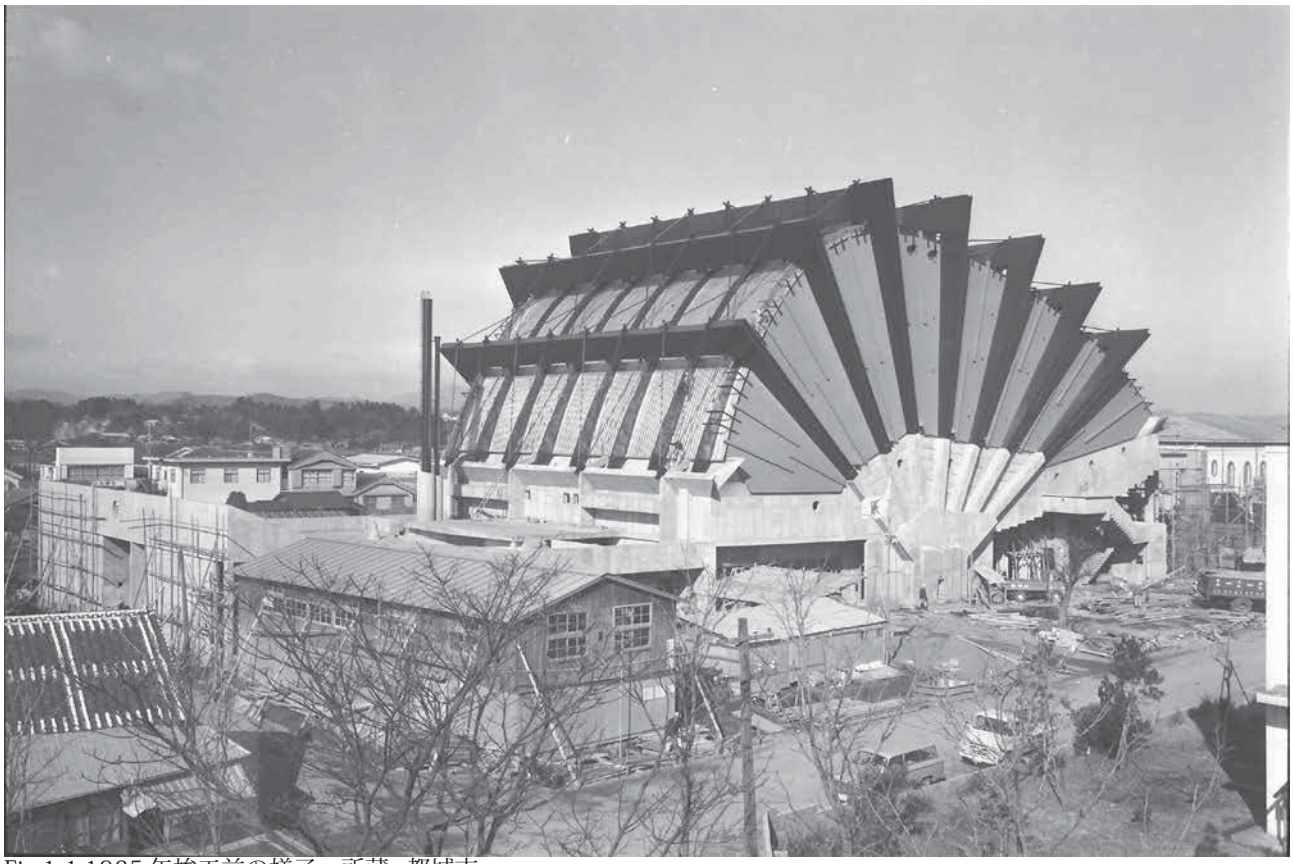

Fig.1-1.1965 年竣工前の様子　所蔵 : 都城市